

大磯海水浴場 開場 130 周年



湘南も海水浴もすべては大磯から始まった！

大磯海水浴場の歴史



企画：2014 いそっこ海の教室実行委員会

制作：NPO 法人 大磯だいすき倶楽部

今年、大磯町は日本で初めて海水浴場を開設して130年になりました。

これを記念して今回、「第10回いそっこ海の教室」の記念事業として、「大磯海水浴場の歴史」と日本で初のサーフィンの歴史をこの大磯で作った、故坂田道さんを偲んで「大磯波乗り物語」のパネル展示を行い、冊子にしました。

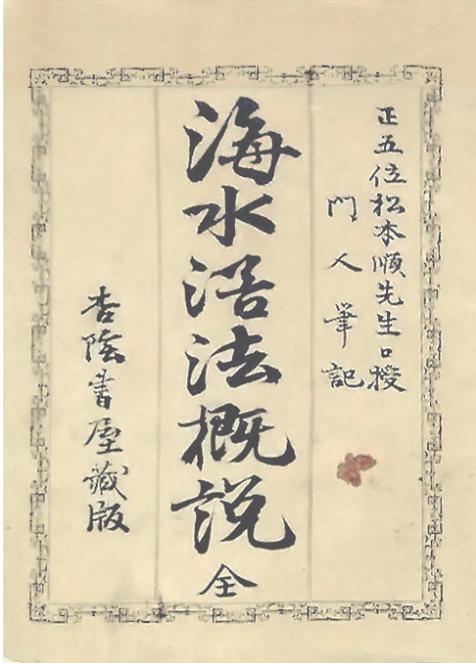
この二つの歴史をこれからの子供たちに、後世まで語り継いでいただきたいと願っています。

2014年

NPO法人大磯だいすき倶楽部

海水浴場を開設して130年

大磯海水浴場の歴史



大磯おおいそから始はじまった
海水浴かいすいよくの歴史れきし



医師いしにより治療ちりょうとして始はじまりレジャーへと発展はってんした海水浴かいすいよく

近代きんだいの海水浴かいすいよくは英国えいこくで医師いしのリチャード・ラッセルが
医療技術いりょうぎじゆつとして確立かくりつし、ロンドン郊外こうがいのブライトンに
海水浴場かいすいよくじょうと医療施設いりょうしせつを開設かいせつしたことに始はじまります。

日本にほんでも明治18年めいじ ねん、医師いしの松本順まつもと じゆんの働きかけにより
大磯海水浴場おおいそ かいすいよく じょうは開設かいせつされました。早くから海水浴かいすいよくの効用こうように
注目ちゆうもくをしていた松本順まつもと じゆんは、大磯おおいそに長期滞在ちようきたいざいし、海水浴かいすいよくを
しながら病氣びょうきを治なおす転地療養てんちりょうようを広めしました。

当時とうじの海水浴かいすいよくは、潮流ちやうりゅうで身体しんたいに刺激しげきを与え海辺あたの清涼うみべな
空気くうきを吸すううことでした。

海水かいすいにつかっているだけで、いわば潮湯治しおとうじのようでした。

海水浴場から始まり、避暑地 別荘地へと変化を遂げた大磯

明治から昭和にかけて、要人の避暑・避寒地として知られており、特に伊藤博文、吉田茂のそれは特に有名である。

山縣有朋や西園寺公望、大隈重信、陸奥宗光、岩崎弥之助、安田善次郎といった政財界要人の別荘が多く建てられた。

1907年（明治40年）頃の大磯には150戸以上の別荘があったといわれる。

大磯と海水浴場の歴史年表

- | | | |
|----|------|---------------------------|
| 江戸 | 1750 | イギリスに海水浴クリニックが開設される |
| | 1862 | 松本潤、長崎遊学中に医療法として海水浴を知る |
| | 1872 | 岩倉使節団がブライトンなど海外海水浴リゾート訪れる |
| | 1885 | 松本順により大磯の海水浴場が開設される |
| | 1886 | 松本順、海水浴啓蒙書「海水浴方概説」を刊行 |
| | 1887 | 旅館・診療所「禊龍館」開業する |
| 明治 | 1887 | 大磯停車場開業（現大磯駅） |
| | 1890 | 大磯海水浴場が舞台の歌舞伎が新富座で上演される |
| | 1896 | 伊藤博文、別荘「滄浪閣」を建てる |
| | 1899 | 東海道線の避暑旅行客に鉄道往復割引切符を発売 |
| | 1904 | 避暑旅行客向けの臨時旅客列車運転 |
| | 1908 | 日本新聞で避暑地百選で大磯が第一位になる。 |
| 大正 | 1917 | 海水浴場開設30年記念祭 海水浴場直通道路開通 |
| | 1934 | 海水浴場開設50周年記念 海水浴場を一般向けに改革 |
| 昭和 | 1959 | 大磯ロングビーチ開業、吉田茂元首相が祝辞 |





海うみでは泳およがず、
浸ひかる事ことが目的もくてき

初期しよきの海水浴かいすいよくは健康法けんこうほう？

この絵は松本順まつもとじゆんが親交しんこうのあった歌舞伎役者かぶきやくしゃを
大磯海水浴場おおいそかいすいよくじょうへ誘致ゆうちした際さいに当時とうじ人気にんきの浮世絵師うきよえし
三代目歌川国貞さんだいめうたがわくにさだに書かせたものです。

書かれているのは海水浴場かいすいよくじょうの筆頭ひつとうであった禱龍館とうりゅうかん。
松本順まつもとじゆんの発案はつあんで開業かいぎようした大型おおがたのこの旅館りょかんの特徴とくちようは、
松本順まつもとじゆんの指導しどうの下もと、医療行為いりようこういがおこなわれていた
処ところであり、さらには安価あんかで日本料理にほんりょうりや西洋料理せいりょうりが
楽しめる保養リゾートほようでした。

海うみでは杭くいにつかまりながら海水かいすいに浸つかる医療法いりようほう
をおこなう歌舞伎役者かぶきやくしゃたちが描えがかれています。



おおいそ
大磯の自然と歴史の魅力

おおいそ てんぶ かいすいよくじょう
大磯は天賦の海水浴場

まつもと じゅん せいほく やま とうなん めん ち かんちょう
松本順は西北に山、東南に面した地で、干潮と
まんちょう さ おお かいすい かせん みず ま
満潮の差が大きく、海水は河川の水があまり混
ざっておらず、波が強く、塩分を多く含み、
かいすい おん ひ か じょうけん
海水温が日によってあまり変わらないなどの条件
から大磯が海水浴の天賦の資質があると考えた。

おおいそ ふじざん みうらほんとう いちぼう
さらに大磯は富士山や三浦半島などが一望でき
おんだん きこう てん しゆくば つちか
温暖な気候であるという点や宿場として培った
れきし ぶん か ふところ ふか めいじ いこう ち
歴史文化の懐の深さもあり明治以降リゾート地
として歩むことになります。



当時の大スターも大磯にぞっこん

セレブもこぞってやってきた！

かいすい よくじょう かいせつ まつもと じゆん おおいそ かぶき やくしゃ
海水浴場を開設した松本順は、大磯に歌舞伎役者
しょうたい おおいそ とうじょう かぶき だいほん
を招待したり、大磯が登場する歌舞伎の台本を
か かせたりするなど、当時のアイドルやスターを
きよう おおいそ つと
起用した大磯の PR に努めました。

けっか おおいそ めいじ ねんだい いたうひろふみ
その結果、大磯に明治 30 年代には伊藤博文、
むつ むねみつ おおもの せいじか みついで みつびし
陸奥宗光などの大物政治家や三井・三菱といった
ざいばつ かんけいしゃ おのえ きくごろう なかむら きちえもん
財閥の関係者、尾上菊五郎や中村吉右衛門、
かたおか にぎえもん ゆうめい かぶき やくしゃ いま
片岡仁左衛門ら有名歌舞伎役者など、今でいう
つぎつぎ べっそう かま
セレブが次々と別荘を構えるようになりました。



シマウマこそ明治の流行

ビーチファッションにも注目^{ちゅうもく}

当初^{とうしょ}の海水浴^{かいすいよく}は水浴び^{みずあ}程度^{ていど}で服装^{ふくそう}も西洋寝巻^{せいようねまき}と
呼ばれたワンピース^{よば}のような洋装^{ようそう}でした。

それが明治^{めいじ}30年代後半^{ねんだいこうはん}には日本^{にほん}の水着^{みずぎ}の元祖^{がんそ}
として海^{うみ}で泳ぐ^{およ}ことを考慮^{こうりょ}した縞模様^{しまもよう}が特徴^{とくちょう}の
「シマウマ水着^{みずぎ}」が登場^{とうじょう}しました。

当時^{とうじ}最先端^{さいせんたん}のビーチファッション^みに身^みを包み^{つつ}
海水浴^{かいすいよく}を楽しめた^{たの}のは富裕層^{ふゆうそう}だけでした。

写真右端^{しゃしんみぎはじ}の男性^{だんせい}はジヤ^よと呼ばれた^よ地元^{じもと}の青壮年^{せいそうねん}
で海水浴客^{かいすいよくきゃく}の安全管理^{あんぜんかんり}や遊泳指導^{ゆうえいしどう}を行う^{おこ}当時の^{とうじ}
ライフガード^{てき}的存在^{そんざい}です。



レジャーとしての海水浴

次第にレジャーへと変化

初期の海水浴や海水茶屋は旅館が運営管理する
事が多く、旅館宿泊者か別荘滞在者が利用する
限定的なもので、日帰り客や地元民はあまり
いませんでした。

次第に海水浴は一般的なレジャーとして楽しまれ
るようになると日帰り客なども増え、賑わいを
増すようになります。

また地元民のビーチファッションは赤いフンドシ
スタイルでした。



かいすいよく
海水浴と茶屋文化が花開く

うみ いえ げんけい ちゃや 海の家 の 原型 「茶屋」とは？

しゃしん げんざい うみ いえ かいすい じゃや
写真は現在の「海の家」のルーツである海水茶屋。

めいじ たいしょう おおいそ
明治から大正にかけて大磯には伊豆竹、黒長、

真間、長小島、平野、坂本、竹永、白長、飯春

など10件程の茶屋があり写真は海水茶屋「坂本」。

きゆうけい きがえ しょみん しきい たかい りよかん
休憩や着替えのほか、庶民には敷居の高い旅館

や別荘滞在者の社交場でもありました。

まるた はしら はり は かんそ つく
丸太の柱と梁にヨシズが張られた簡素な作りで

そこに客から送られた暖簾がかかっています。

かんそ まみず はい たる
サービスも簡素で、真水の入った樽がおかれ、

だ だ
出されるものは麦茶だけでした。



女性も男性も板子で遊ぶ風景

日本発の波乗り文化

日本は古くから波乗りをしていました。

現在のボディボードに似ており、板子（イタゴ）と呼ばれる板に腹ばいに乗る簡単なものでしたが、大正13年には「日本体育叢書 第十二編 水泳」に板子乗りについて詳しく記述されているように乗り方が体系化されていました。

さらに海水茶屋では板子の貸し出しなどがあり、それが一般的に普及するきっかけになりました。板子の中には、海水茶屋の馴染み客がスポンサーとして寄贈した商標入りのものもありました。

